

『百年滄桑（そうそう）』からみる 台湾水力発電の父・土倉龍次郎の足跡

本 庄 孝 子

1. はじめに

1905年に台湾の台北市で初めて電灯がとまり、近代化への幕開けとなった。

台湾で最初の台北亀山水力発電所の完成百周年にあたる2004年に、その変遷を解明し、歴史をひもとき、改めて位置付けることが台北県文史学会らによって取り組まれ、文化財の保存と産業遺産の再生についても目的にされた。夏聖禮、趙俊祥、江中信が著する『百年滄桑』は、台北県文史学会が亀山の研究と記録を編纂したもので、国家文化芸術基金の協賛によるドキュメンタリーと併せて、亀山発電所の100年来の時代の様相と変転を完全に再現できるように願ってなされた。亀山水力発電所に関連する人達・場所・記録類・装置類などを丁寧な取材を通じて取り組んだ記録の集大成である。

今回、土倉正雄・宣子監訳による日本語版（写真1）が出版されたのを機会に、台湾水力発電の父・土倉龍次郎の足跡を明らかにしたい。記述にあたりこの本からかなりの部分を引用したことをお許し願いたい。

亀山発電所は奈良県川上村大滝の土倉家（写真2）の事業の1つとしてなされた。

台湾の水力発電の父とよばれる土倉龍次郎の子孫は、百周年に亀山発電所を見学した。その年の秋、台湾の方達が日本に取材にきた折、亀山水力発電所に関連する地域、奈良県川上村の生家跡、京都の蹴上発電所、岐阜の八百津発電所、同志社大学等を、龍次郎の子の土倉正雄の運転で案内した。台湾では当時発電所で働いていた人達の子孫に取材をすると共に、当時の新聞や公文書類の調査など、たくさんの取材と調査の後に『百年滄桑』の



写真1 『百年滄桑』の表紙
(右下龍次郎)

中国版ができた。土倉正雄・宣子夫妻は記念に本を頂いたが、日本の人にも読んで欲しいと思い、夫妻で全てを和訳し、関連資料を加えてできあがったのがこの本である。

台湾に貢献した人として、嘉南大圳（農業用の鳥山頭ダム）を造った八田與一が有名だが、この本から土倉龍次郎は八田に匹敵する人物であることを確信した。



写真2 土倉龍次郎の家族の写真(1887年)

2. 土倉家の林業と亀山

土倉龍次郎は吉野の山林王として有名な土倉庄三郎の次男として1870年（M3）に川上村で生まれた。大学在学中、同志社大学創始者の新島襄の影響を受け、早くから南洋開拓の夢を持ち、卒業の22才の時に、父に宛てた「南洋雄飛への請願書」の書面は氏の想いが沸々とあふれている。

1895年日清条約締結後、台湾総督府が置かれた。当時は軍属しか台湾に渡れず、この年の12月に龍次郎は軍属の資格を得て台湾に渡る。土倉家は台湾での林業育成のために日本政府に働きかけ、政府は1896年に「林業貸し出し及び林産物売買制度」を発令した。1897年龍次郎は「化用生蕃」、「部分木制度」など「植林経営意見書」と「植林貸下願書」を提出したが却下された。その後修正して「林野貸下許可願」を再提出した。翌年の12月に土倉家は1899年以降300年間、総面積一万町歩の造林許可を取得した。

龍次郎一行は1895年末に基隆着、台湾到着後、尾形という日本人の案内人と原住民の通訳、ポーター10数人を引き連れ、100日分の食料を用意し、自分の夢が達成しそうな地を求めて基隆から山岳地帯に入り、台南まで90余日をかけて縦走した。この間、先ず案内人と通訳にビーズ、毛糸、マッチ、毛織物など土産物を持たせ、目的の部族長の所へ先行させ、一行に全く敵意の無いことを伝え、先方の理解と信頼を得てから次々と進んでいった。山岳部は未開でマラリアが流行し毒蛇や首狩り族が出没する地だった。

1899年、故郷の川上村の景色に似た亀山に造林事務所を開設した。林材の運搬に必要な水量の豊かな川が近くにあり、溪流に水路を開通させることを最も重要な要因と考えたからだろう。龍次郎は家業の林業をベースに計画をねり、1万町歩を7区画に分け10年毎に一区画を植林、植林計画の全面積を70年かけて完成させる。そして70年後、植林した順に合わせて伐採、再植林するものだった。

土倉家の造林の原則は土倉正雄の談話の中で語られている。「造林で大切なことは木を切ることです。木を切る為の原則は、1本の大木を切った時、10本の苗を植えなければなりません。この10本の苗木の成長期は同じではない。問題は、何年後にそれらの木を切ることができるかということ。木を切るとき、なぜ一定の植林が必要かという、木を切ってしまうと、全ての木がなくなること、一山全てが荒廃に帰してしまう。これは、保持の法則から見て、水と土が失われるということなのです。森林は食物連鎖と非常に関係があります。森林も重要な役割を担っています。つまり、食物連鎖の中で最も根本的な役割を担っている。（現在、森林は海の豊かさと直接関係があることが証明されている）。父がどのようにしてこのような植林の概念に達したのか分かりません。たぶん何らかの食物連鎖、あるいは大自然の中の生命の循環からかもしれません。このような考えが心の中にあったのでしょう」。

龍次郎が行った「化用生蕃」と「部分木制度」は顕著な効果を収めた。「化用生蕃」を簡単に説明すると、原住民に現存の立木を用いて炭焼きや製材方法を教え、産物を屈尺交換所へ搬出し、それらと生活必需品や食料と交換させる。さらに進んで育苗や造林技術を伝授する。「部分木制度」は吉野地方の林業経営方式で、造林事業に協力する原住民に、造林成功後一部の山林を直接分配して所有権を与える。最終的には物質生活を安定させるため、礼節を教え、風俗を改善し、漸次原住民を文明生活へ導くことであった(写真3)。龍次郎は原住民から「トーヤンタウケ(土倉頭家-土倉の大旦那)」と呼ばれ大変慕われていた。

1901年 庄三郎還暦の祝いに、ウライタイヤル族の族長、女性など9名は龍次郎の招きで日本観光をした。最初に大滝を訪れ、山林王土倉庄三郎とその林業の盛況を目のあたりにした。当時の古い写真には、和服と洋服の日本人に混じって、中国服の台湾人と原住

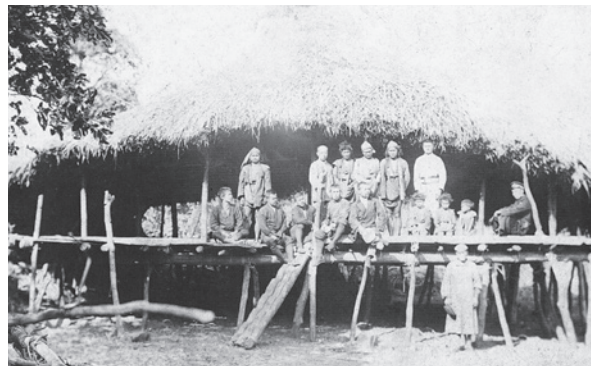


写真3 現地人と共に（1897年頃、後列左から2人目龍次郎）



写真4 庄三郎還暦の祝いに氏神に参拝の帰路写す（1901年）

民の服装のウライタイヤル人等が一堂に会して写っている（写真4）。まさに、人々の心を驚かす歴史的場面であると著者は語っている。大阪、神戸、京都、奈良を観光した時、彼らが驚きの言葉を発したことが記されている。

1904年、龍次郎は植林事業を続けながら「台湾採脳拓殖合資会社」を継承し、社名を「台湾製脳合名会社」に変更、大規模な製脳事業（クスノキから樟脳の製造）に着手した。製脳工や作業主任ら960人を採用し、製脳窯は450基、台北文山地区最大の製脳業者と称され、従業員数も二千余人にあがった。

3. 亀山水力発電所建設の取り組みと規模

その頃、龍次郎の協力者であり大学で同級生だった津下紋太郎の友人清水泰次郎は亀山の南勢溪の豊富な水量に目を付け、水力発電所の構想を持った。清水は津下の同窓で、アメリカに留学、鉱山技術師となり帰国していた。良好な鉱山の所在地を物色中だった津下は、1899年、清水を台湾に呼び寄せ、金鉱探検隊の隊長に任じた。清水は発見した水源を利用する水力発電事業を提案し、土倉らは直ちに賛同、計画立案に取りかかった。龍次郎の長兄鶴松の資金援助の下、1902年10月、総督府に電気事業開発の申請書を提出、1903年2月、期限24年の許可を得た。

龍次郎は「台北電気株式会社」を設立、台湾で最初の水力発電所の建設を目指し、万全の準備に取りかかった。この発電所が南勢溪河岸の亀山発電所である。

龍次郎は持ち株57%の大株主で社長に、津下は専務取締役役に就任した。日本人の株主の多くは、政界と相通ずる仲の政商であった。総督府に協力して政務を推進した紳商や指定を受けた商人は、総督府とは特別なつながりを持ち、後から渡台した大勢の投機商人とは全く違っていった。台湾人の持ち株は8.7%にすぎなかった。

龍次郎は、総技師募集のため日本へもどり、東京帝国大学電気科を卒業したばかりの大越大蔵（29歳）を主任技師として招いた。大越はすぐ実地調査に入り、8月、現地測量を完了し、市場調査を行った。アメリカから発電機等を購入して最初の水力発電を完成させ、1905年台北市の三市街区に明かりがもった。

このダムには魚梯（魚道）が付けられ、長さ7m、広さ2.7m、深さ0.6mの規模で、台湾で最古の施設、歴史的価値と生態系保護の上で重要な意義を持つ。日本人が100年前に魚類回遊と生態系保護の考えを持っていたのに反し、後の政府が新店溪に建設したダムにそのような施設が皆無であったことは、反省すべきであろうと、記している。もしかしたら、このような本格的な魚道はその当時あまり例を見ないのではなかろうか。日本もつい最近

まで、魚道は無視されてきた歴史がある。大越は当時の最新技術を駆使してこの発電所を作ったものと思われる。

このころ土倉本家は経済上困難な時期にあり、龍次郎は船出した新会社の権利を譲るために奔走した。紆余曲折はあったものの、僅か8ヶ月後、総督府は「台北電気株式会社」を買収、「台北電気作業所」を設置、工事を引き継いだ。買取価格を決める時に、龍次郎は役人に帳簿を見せ、帳簿に交際費が一切書かれていなかったことに、総督府側は驚いた。龍次郎らは交際費を必要としなかった。官庁の役人に贈賄饗応せず、重役会議は私邸で開き、会社創立に際して相談会は山の事務所で煎り豆を茶請けにして行われ、宴会や祝賀会や歓迎会など催し物は一切廃止した。その結果か買取価格は実費額であった。クリスチャンの龍次郎を始め、みなピューリタン精神で取り組んでいたのである。

当時、山間部にマラリアが流行しており、工事は困難を極めた。通信部長が「亀山において水力発電所の建設を開始した時、山地にはなお匪賊や蕃族が横行していて、工事の進捗は非常に困難だった」と述懐している。その後、龍次郎は植林事業を続けた。

1904年龍次郎は妻を迎えた。1905年2月、樟脳小屋が原住民に襲撃され14人死亡した。皆昼間の疲れであかあかと電灯を付けて寝込んでいたらおそわれ、首を切られた遺体は誰か区別が付かなくて、一人背の高い人だけ分かったそうだ。

台北市はそれまでランプ生活だった。1905年10月に3000～4000個の電灯がとまり、台湾は近代科学技術文明の時代に入った。

電力開発が始まったばかりの黎明期に、亀山発電所はできた。記録によると11000Vで発電し、台北の3市街区は夜間煌々と明かりをはなち、「不夜城」の様相を呈し、その明るさは日本の都市にも劣らぬ様であったと思われる（写真5）。日本でも、その当時これほどではなく、3300Vか、6600Vであった。亀山発電所の水車は日本人が初めて使ったモーター社の製品であったと思われる。魚道を付けたことを含め、当時の最新の技術と装置を用いたようである。

亀山発電所から出る水は、総督府の公館内に「台北水道ポンプ室」を設立し、10数組のポンプステーションを設置、新店溪から水を吸い上げ、浄水池で処理して1907年、台北市内に水道水を供給した。

龍次郎の本家の経済危機は大きく、

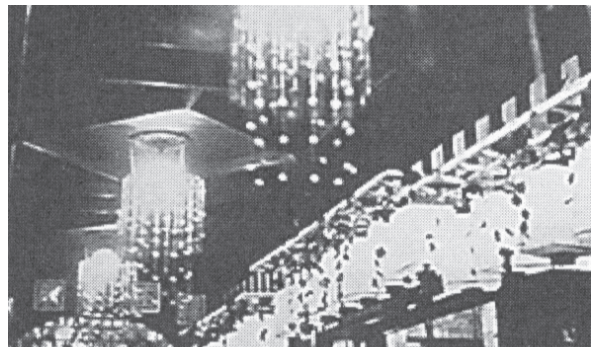


写真5 台北本町のイルミネーション「始政四十台湾博覧会誌」1939

龍次郎は1907年植林事業と製腦事業を三井合弁会社に譲渡，台湾支店長の藤原銀次郎が事業を支援，山林投資総額約10万円に対して，三井家に22万円で売り渡した。

土倉家が造林事務所を開設して前後8年，台湾事業の屈尺山林事業と電気事業の成功は台湾に大きな足跡を残した。龍次郎は台湾に渡って13年後の1907年，万感の思いで台湾を引き揚げた。帰国後，次の新しい挑戦としてカーネーション栽培とカルピス創設に貢献した（写真6）。



写真6 「日本のカーネーションの父」土倉龍次郎

正雄は，父龍次郎の一生の事業経営哲学は次の「土倉精神」そのものであったと述べている。父は代々伝わる土倉家の家訓即ち

1. 主人は家の模範となれば先に立ちて多く勤労せよ
2. 自ら儲けるべき金の三分は他人に儲けさせよ
3. 公共，慈善の事業に対しては決して人後に落ちるなかれ
4. 一家相和し相信じ家業に励め

に従って事業を始めた。

4. 発電所百年祭の活動

亀山発電所は1943年に撤廃，1945年に発電機は他の発電所に移転，その後，皆の記憶から遠ざかり，地元の住民達は，ガランドウの建屋を貯蔵庫代わりに使ったりしていたが，歴史の伝承はとぎれていた。現在は当時の建物や部分的に遺構が残っている。建物の遺構はこの本の表紙を飾る。

台北県文史学会は亀山発電所100年を記念して，さまざまな行事を行った。2004年4月に龍次郎の4男土倉正雄・

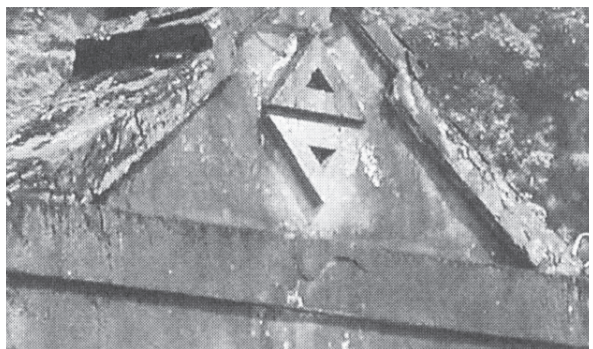


写真7 台湾で初の発電の証明「イナズマの標識」

宣子夫妻、2男土倉松生の子・土倉幹雄と夏目規久子4人が亀山発電所を見学（写真7）、亀山文史研究会のセミナーで正雄は講演した。7月には「亀山を照らそう－亀山発電所再利用の地域キャンプ」を開催、土倉幹雄は再度訪台、旧発電所百年祭活動に出席した。7月、亀山の地域社会企画案の推進を開始。11月、台北県文史学会と立法委員趙永清事務所は「旧亀山発電所再利用公聴会」を共催し、台北县政府文化局古跡審査委員が共同調査した。

4.1 日本での取材

2004年10月 中国側の夏聖禮らが取材活動のために日本を訪れた。土倉正雄は自ら車を運転して、川上村大滝、蹴上発電所、旧八百津水力発電所、同志社大学を案内した。

龍次郎に関する資料は、大滝の家が洪水で流れたこともあり、龍次郎の実像を語る資料に乏しかった。台湾総督府に出した書類等は総べて残っており、膨大な量のコピーを正雄夫妻は頂いたという。あと新聞記事などがあるのみで、日本訪問はこの空白を埋めるためであった。

① 川上村大滝の土倉屋敷跡の訪問

著者が川上村の第一印象を「新店溪の上流の山水の間に立っているようだ」と記している。

龍次郎の生家、土倉家の屋敷は伊勢湾台風（1959年）で流失、跡地が村の文化財になっている。父・庄三郎は『樹喜王、造林王』と呼ばれ、郷土ひいては奈良県の偉大な先駆者である。ここで森林開発と経営に名声をかせ、1917年没後、村民はその功績と徳望を称え、長く記念するために銅像を建て、また、村の入り口近くの吉野川岸壁に『土倉翁造林頌徳記念』の9文字を刻んだ。碑文の全長23.4mと雄大で壮観である。碑文も村指定の文化財となっている。

庄三郎は「土倉式造林法」を編みだし『吉野林業全書』の発行を奨励して自ら校閲している。翁は二代目川上村村長ともなり、住民の生活向上の産業育成に尽力した。翁は生涯、自分の財産を1/3を事業に、1/3を教育に、1/3は社会のために使い果たしてしまった。

川上役場を訪問、川上村文化財委員会の人達と交流、生家跡地、龍次郎の菩提寺にも訪れた。

② 八百津と蹴上発電所の再利用

旧亀山発電所を、稼働していた当時の機械・設備類の模型を展示するため、発電博物館として利用するために、当時の機械・設備類の詳細を知る必要があった。事前調査で、米国のモーガン・スミス社のマコーミック式の水車、及び発電機と励磁機は米国のウェスティング・ハウス社の製品であることが分かった。それら関連装置がアメリカもしくは日本にあるだろうと、八百津と蹴上発電所を見学することになった。ここに至るまで関西電力や台湾・桂山発電所などの協力によるところが大きい。

京都・蹴上発電所は、1892年に認可を受け、日本初の民需用水力発電所である。これにより、水力発電の発電コストの低減をもたらし、水力発電が火力発電に勝ることを証明するようになった。

京都府知事北垣国道の発案で実現し、東京遷都後、低迷した京都の振興を急務とし、琵琶湖の水力を利用して、琵琶湖疎水を建設し、運河と発電に利用することを提案、完成させた。1895年1月、日本初の市電を蹴上発電所の電気で走らせ、その後の京都の発展に大いに貢献したことはよく知られた話である。

日本で知られているマコーミック型はすべて改良型のタイプで、これらはすでに役目を終え、半数以上が廃棄処分されたという。類似の機種を探し出すのは容易なことでない。蹴上発電所を見学した折、西村立美主任は、10数年前に夷川発電所で見たことがあり、その工場内ユニットの配置図と構造図を参照しながら説明してくれた。その日の晩、彼から図面が届けられた。分厚い図面を見ながら著者らは大いに感動した。著者らが台湾に帰った直後、安積発電所に展示されている機種が亀山の機種とよく似ていて、内部の構造も見ることができるとの報告とともに写真が送られてきた。この水車は何回も移転され1990年6月に運転停止となった。67年間稼働し、累計発電量は5億5百万kWであった。唯一のユニットなので関西電力にとっても貴重な物であり、関西電力博物館に保存されるように指定された。この水車はフランシス型で、出力が1096kWである。蹴上発電所の第二期建物は1936年の設備撤廃後もそのまま保存されている。発電所施設群全体が2001年、日本土木学会より「選奨土木遺産」に選考された。蹴上発電所の第二期建物を記念館として活性化し、利用する計画があったが、バブル崩壊により取り消された。

関西電力は国の指定を受ける方針に傾いていたが、1995年1月の阪神大震災が発生し、会社が復旧作業に全力を傾けたため、史跡指定を見送ることにした。

③ 旧八百津発電所資料館

旧八百津発電所は岐阜県加茂郡八百津町にある。木曽川水系で初めて建設された水力発電所。1906年10月に名古屋電力株式会社を設立。難工事の末、1911年12月に完成、翌年1月に最大出力7500kWの送電が開始された。水車は米国のモーガン・スミスの横軸フランシス式を使用、亀山発電所が使用したものと同級のユニットだが、全く同じではなく、内部構造に改良が加えられていた。聞くとおとよによれば、マコーミック型の水車は日本では絶滅してしまったという。旧八百津発電所は1975年、八百津町重要文化財に指定され、さらに1977年、岐阜県重要文化財に指定された。翌1978年、八百津町郷土館として開館、1998年、国の重要文化財に指定され、旧八百津発電所資料館として公式に開館、保存活用されている。

④ 同志社大学

龍次郎の母校同志社大学の本井康博教授は土倉家の研究を重ねている。一行は教授を大学に訪問して、津下の自伝の中に台湾での龍次郎や事業に関する一章を見つけ、「これはまさに得がたい宝物と言える」と著者は記している。余談だが同志社大学の卒業生の中で、著名な人物があげられているが、土倉龍次郎の名はなかった。著者らはその中に龍次郎の名を残すように助言した。

4.2 台湾地域発展へ

台北県文史学会は台湾で、当時働いていた人たちの子孫に、粘り強く取材をしたが、当時働いている親と離れて住んでいたこと、小さかったことなどから、断片的な情報を得るに留まった。現在、亀山発電所付近に住む住民にも取材したが、古い建物を農作業の収納所などに活用していたが、誰もその歴史的なことを知らなかった。台北県文史学会の活動から住民達は、亀山発電所に興味と関心を深め、新店市と一緒にコミュニティ作りに参加している。そして台北県文史学会と立法委員趙永清事務所は「旧亀山発電所再利用公聴会」を共催、台北县政府文化局古跡審査委員会が共同調査した。

現在の新店市内の亀山（きざん）付近に、土地の人が「土倉山」と呼んでいる山がある。

5. 日本語版の付記

『百年滄桑』の「あとがき－監修をおえて」を土倉宣子が記している。この中で、「母りゑに聞く」は龍次郎の妻りゑが台湾時代での思い出を語ったテープを起こしたもので、そ

の時代の体験者の証言シリーズとして興味深い中身である。「大滝から杉本、益田、村山、西山の4人が補佐役として龍次郎について台湾に渡った。その中の一人、村山令蔵は元三田藩士村山正敏の長男で、同志社普通科を明治24年に卒業し、龍次郎の一年先輩であった。台湾から撤退後も、様々な事業に着手、順調に業績を伸ばし、発動機製造株式会社（現ダイハツ）や日露実業株式会社の取締役などを歴任した。このように龍次郎を始めとし、それぞれが日本に引き揚げた後も、努力して事業を開拓し、成功を収めた。台湾での経験は決して無駄ではなかった」と言っている。津下紋太郎は後にカルピス食品の社長、及び日本石油の専務取締役を勤めた。

そして巻末に「龍次郎の請願書」の全文と、龍次郎が持ち帰ったとされる川上村の台湾の杉「広葉杉(こうようざん)」の写真も付け加えられた(写真8)。



写真8 広葉杉（こうようざん）川上村
龍次郎が台湾から持ち帰ったと
される

年譜

- 1870年 龍次郎は川上村大滝で土倉庄三郎の次男として生まれる
- 1892年 同志社卒業に際して父・庄三郎宛「南洋雄飛への請願書」(22歳)
- 1895年 下関条約 龍次郎台湾に渡る(12月、軍属の資格で)
- 1896年 日本政府は「林業貸し出し及び林産物売買制度」を発令
- 1897年 龍次郎は「化用生蕃」、「部分木制度」など、「植林経営意見書」と「植林貸下許可願」を提出したが却下。その後、修正して「林野貸下許可願」を再提出
- 1898年12月 土倉家は1899年1月以降300年間の造林賃貸許可を取得(総面積一万町歩)
- 1900年 龍次郎は亀山に造林事務所を開設(道路建設、河川の補修、住居や作業所の建設)
- 1991年 ウライタイヤル族を日本観光に招待(大阪、神戸、京都、奈良)
- 1902年 新店溪(亀山)発電を総督府に申請
- 1903年2月 総督府は龍次郎が大株主(持株57%)である「台湾電機株式会社」の設立を

- 許可（期限24年）、民間資本で「深坑序文山堡龜山」に水力発電所を建設。同年10月、総督府は「台北電気株式会社」を買収、「台北電気作業所」を設置、工事を受け継ぐ
- 1904年 台湾採脳拓殖合資会社を継承し、社名を「台湾製脳合資会社」に変更、大規模な製脳事業に着手（従業員2000人）。りゑと結婚。
- 1905年 樟脳作業所が原住民の襲撃で14人死亡（2月）。龜山発電所完成。10月、台北の三市街地区に明かりがともる。
- 1907年 植林事業と製脳事業を三井合名会社に譲渡 龍次郎帰国・・・後にカーネーションの温室栽培とカルピスの市場開発に力を注ぐ
- 1909年 台湾総督府、三井が土倉の山林事業の継承を正式に許可
- 1943年 龜山発電所撤廃
- 2000年 龍次郎の次男松生と孫の幹雄が訪台、屈尺、龜山を見学
- 2004年 4月 龍次郎の4男土倉正雄・宣子夫妻、龍次郎の孫・土倉幹雄、夏目規久子が龜山発電所見学。正雄は龜山文史研討会で講演
- 龜山発電所を歴史的な遺産として保存へ、地域の委員会と政府委員会が共同調査
- 2004年10月 台湾側の取材活動に土倉正雄は自ら車を運転して、大滝、蹴上発電所などを案内する（土倉正雄・宣子夫妻が対応）
- 土倉幹雄再度訪台、旧発電所百年祭の活動に出席
- 2005年 『百年滄桑』中国語版発行
- 2006年 『百年滄桑』日本語版（東洋印刷）発行。8月、ドキュメンタリー「龜山水力発電所」放映会（新店市）、土倉正雄・宣子夫妻出席。12月、新店市長一行は池田市を訪問

参考 龍次郎の台湾での植林（台湾大学の「李 文良博士」の調査による）

- 1899年（M32）：欒（ケヤキ）、杉、檜（ヒノキ）の苗百万本移植
- 1903年（M36）：杉82万本、檜26万本 面積144町の植林
- 1904年（M37）：ケヤキ、クヌギ99450株、33町歩
- 1905年（M38）：杉4万9060株、檜1万1800株 10町歩の植林
- 苗圃は15町歩、杉苗：150万株、檜苗：50万株、欒苗：70万株、全一万町歩

追記

台湾から帰国後、カーネーション栽培は龍次郎の後半生の事業として輝いており、業界ではカーネーションの神様と言われている。日本でカーネーションが栽培されて100年の2008年の母の日に、龍次郎の功績が大きく新聞報道され、正雄・宣子夫妻はカーネーション100年祝賀式典に招待された。

『百年滄桑』発行を機に、新店市の市長一行は、龍次郎の子孫・土倉正雄夫妻が住む池田市を友好訪問した。

謝辞

この原稿に当り、何度も取材に応じて下さり、校正の折りにはたくさんのアドバイスを下さった土倉正雄・宣子夫妻に感謝したい。

余談だが、土倉宣子さんは八田與一の娘さんと台湾の女学校で同窓だったことを取材の時に伺った。また、土倉正雄氏は私の父が勤めた会社・一部上場の木村化工機株式会社の社長であったことに深いえにしを感じる。